介護を必要とするペットの主介護者における介護負担感の軽減に関する検討

―パーソナリティ特性・介護肯定的評価・ソーシャルサポートの観点から―

A Study on the Reduction of Perceptive Care Burden in the Primary Caregivers of Pets in Need of Long-Term Care
－From the Perspective of Personality Traits, Caregiving Positive Appraisal, and Social Support－

青木理・佐藤睦子
Osamu Aoki and Mutsuko Sato

Abstract : As the relationship between pet owners and their pets have been changing, the severity of pet loss becomes an issue. We focused on the difficulties encountered while keeping pets, which are considered to be one of factors, and examined them from the perspective of burden. The results showed that there was a significant difference in the perceptive economic burden depending on whether the pet had a disease or not. The results of the multiple regression analysis suggested that the psychosocial resources that affect perceptive care burden may differ depending on whether the pet has a disease or not.

1． 問題と目的

動物病院における家庭内飼育動物（以下、ペット*1とする）の診療業務に際しては、疾病罹患動物に対する的確な診断･治療技術とともに、飼育者の意思決定に対する支援、心理的配慮が不可欠である。疾病の診断・治療技術の発展は日進月歩である一方、飼育者の心理に関する研究は大きく遅れており、最近になってようやく注目されつつある。

その多くは「ペットロス」に焦点を当てた研究であり、木村・金井・伊藤・近澤・堀・星・川畑・前沢(2016)によるとペットと死別後２ヶ月目の時点でGHQ精神健康調査票により精神科医の介入が必要とされるリスク群に分類された飼育者が56.7％に及んだとされている。ペットロスの研究において、ペットの飼育中に遭遇する困難さを適切に処理できなかったことが、後の重篤なペットロスをもたらす一因となっている可能性が挙げられているものの、飼育中に遭遇する困難さに焦点を当てた研究は数少ない。

本邦における犬と猫の飼育頭数は約1857万頭（ペットフード協会, 2019）であり、これは15歳未満の子どもの総数約1512万人（総務省統計局, 2020）を大きく上回っている。アイペット損害保険株式会社（2018）の調査によると33.8％の飼育者が「ペットはこども」と回答しており、少子高齢化社会においてペットを子どもの代わりとして飼育する人の増加を示唆していると言えよう。また、内閣府（2010）が日本全国の20歳以上のペット飼育者を対象に行った調査で

*1　家庭内飼育動物の呼称には、従来の愛玩動物を意味するペットの他に伴侶動物、家庭動物などがある。飼育者との関係性の変化を表すには後者の方が適していると考えるが、本稿では一般的な通りの良さから「ペット」とした。

は、ペットを飼育する理由について「家庭がなごやかになる」を挙げた人は55.3％、「生活に潤いや安らぎが生まれる」を挙げた人は61.4％であり、過半数の飼育者がペットに対し情緒的な関わりを求めるようになっていることも窺える。

このようなペットと飼育者の関係性の変化が背景となり、ペット飼育者が獣医療に求める治療水準が高まった結果、ペットの平均寿命は延長され、死亡原因は心疾患、腎疾患、腫瘍性疾患といった慢性・進行性の疾患が上位を占めるようになっている（アニコム「家庭どうぶつ白書」制作チーム, 2019）。これらの慢性疾患では毎日の投薬、採食の補助、頻回の通院や飼育環境の調整が必要となる場合があり、「介護」に相当する負担となっていると考えられる。

人医療領域においては高齢化に伴う介護機会の増加への対応として、介護保険制度を導入するなど在宅介護の推進が行われているが、介護者の高い介護負担感や、それに関連した抑うつなどの心理的な影響が問題視されており（松村, 2014）、介護負担感の軽減について様々な検討が行われている。

獣医療領域における介護負担感の軽減についても、先述の通り人とペットの関係性が家族としての性質を帯びているため、医療領域で挙げられている心理社会資源が有効ではないかと考えられる。しかし、ペットの介護と人の介護とで大きな差もある。その一つが公に認められる悲嘆（予期悲嘆を含む）かどうかである。対象喪失後は最も顕著であり、ペットに関連する悲嘆は理解されにくく軽視される傾向にある（濱野, 2020）。喪失後という大きな悲嘆に対しても社会的サポートが得られにくいことからは、介護期間中は更に社会的サポートを得難いことが想定される。本邦の国民性として個人の自尊感情よりも周囲との協調的な社会関係が幸福感と関連するという文化心理学的視点からの報告（Uchida, Norasakkunkit, & Kitayama, 2004）がみられており、仮にペットの治療が良好な経過を辿っていたとしても、治療のために他者との関係性が悪化した場合は飼育者の生活の質は低下することとなる。それに加えて、「理解されない」との思いが結果的に介護負担感へと転化していく可能性も考えられる。

そこで本研究では、本邦において慢性・進行性疾患に罹患したペットの飼育者が抱えている介護負担感の調査を行うと同時に、介護負担感に影響を与える要素として人医療分野において注目される場合が多い心理社会資源である介護肯定的評価、ソーシャルサポート、パーソナリティ特性の観点より数量的分析を行い、それぞれの影響について検討することを目的とした。

本研究における仮説は以下のように設定した。

仮説１　慢性・進行性疾患に罹患したペットの飼育者は介護負担感を抱えている。

仮説２　介護に肯定的評価を持つ飼育者はそうではない飼育者と比べ介護負担感が低い。

仮説３　ソーシャルサポートを受領している飼育者はそうではない飼育者と比べ介護負担感が低い。

仮説４　パーソナリティ特性は飼育者の抱える介護負担感の程度と関連がある。

２．方法

⑴対象と調査方法（実施期間：2020年９月～11月）

１）対象者：関西圏の動物病院に通院する20歳～79歳のペットの飼育者。疾病に罹患しており継続治療のために来院したペットの飼

育者50名、対照群としてワクチン接種等の予防を目的に来院したペットの飼育者50名の計100名。

２）調査方法：質問紙調査。研究対象者には通院する動物病院で調査票を受け取った後、自宅で回答し、同封の返送用封筒を用いた郵送を依頼した。100部の配布を行い、有効回収数は59部（有効回収率59％）であった。

なお、本研究は京都ノートルダム女子大学設置の研究倫理審査委員会の承認を受け実施された（承認番号20－004）

⑵調査内容

１）基本属性

回答者の年代、性別、ペットの種類、ペットの年齢、動物病院への通院頻度、ペットの疾病名、罹患してからの期間、ペットの食欲について尋ねた。

２）Big Five尺度短縮版（並川・谷・脇田・熊谷・中根・野口, 2012）

パーソナリティを「パーソナリティ特性の５因子モデル」に則り算出するための尺度である。情緒不安定性（５項目）、外向性（５項目）、開放性（６項目）、調和性（６項目）、誠実性（７項目）の５因子、計29項目であり、各項目は「あてはまらない（１点）」、「あまりあてはまらない（２点）」、「どちらともいえない（３点）」、「ややあてはまる（４点）」、「あてはまる（５点）」の５件法で回答を求めた。

３）家族介護者ソーシャルサポート尺度（西村, 2014）

家族介護者のインフォーマルなサポート受領状況を総合的に評価するための尺度である。親族からの情緒的サポート、親族からの手段的サポート、非親族からの情緒的サポート、非親族からの手段的サポート、被介護者からの情緒的サポートの５因子から構成され、各３項目、計15項目である。本研究ではペットの主飼育者（疾病罹患群では主介護者）が研究対象のため、「介護」を「ペットのお世話」、「親族」を「家族（同居の有無は問わない。パートナーも含む）」へ変更し、「非親族」を「友人（散歩仲間も含む）」と「かかりつけ病院のスタッフ」の２項へと分離した。また、「被介護者からの情緒的サポート」の項目を除外して使用した。各項目は「ほとんどない（１点）」、「あまりない（２点）」、「ときどきある（３点）」、「よくある（４点）」の４件法で回答を求めた。

４）人とコンパニオンアニマルの愛着尺度（濱野, 2007）

飼い主とペットの愛着を測定するために作成された尺度である。快適な交流（９項目）、情緒的サポート（７項目）、社会相互作用促進（７項目）、受容（４項目）、家族ボンド（４項目）、養護性促進（３項目）の６因子、計34項目から構成されている。本研究ではこのうち「情緒的サポート」の因子を抜粋して使用し、「被介護者からの情緒的サポート」に相当するものとして扱った。各項目は「あてはまらない（１点）」、「あまりあてはまらない（２点）」、「どちらともいえない（３点）」、「ややあてはまる（４点）」、「あてはまる（５点）」の５件法で回答を求めた。

５）介護肯定的評価尺度（櫻井, 1999）

介護者の肯定的介護評価を多面的に測定するために作成された尺度である。介護状況への満足感（９項目）、自己成長感（３項目）、介護継続意志（２項目）の３因子、計14項目から構成されている。本研究では「お年寄り」を「ペット」へ、「介護」を「お世話」へと変更して使用した。各項目は「まったくそう思わない（１点）」、「あまりそう思わない（２点）」、「ややそう思う（３点）」、「非常にそう思う（４点）」

の４件法で回答を求めた。

６）介護負担感尺度（櫻井, 1999）

介護者の認知的負担を多元的に捉えるために作成された尺度である。拘束感（５項目）、限界感（４項目）、対人葛藤（５項目）、経済的負担（２項目）の４因子、計16項目から構成されている。語彙の変更および回答の選択肢は介護肯定的評価尺度と同様のものとした。

3. 結果

⑴基本属性

回答者の基本属性は表１・表２に示した通りであった。

⑵ソーシャルサポート項目の構造と信頼性

本研究では飼育者のソーシャルサポート受領状況を評価する尺度として西村（2014）の“家族介護者ソーシャルサポート尺度”と濱野（2007）の“人とコンパニオンアニマルの愛着尺度”の２つの尺度を組み合わせており、また介

表１　基本属性

		罹患なし (n=22)	罹患あり (n=37)	合計 (n=59)
飼育者				
年代（%）	20 代	13.6	5.4	8.5
	30 代	22.7	10.8	15.3
	40 代	22.7	16.2	18.6
	50 代	31.8	37.8	35.6
	60 代	9.1	24.3	18.6
	70 代	0.0	5.4	3.4
性別（%）	女性	90.9	94.6	93.2
	男性	9.1	5.4	6.8
通院頻度	≧週１回		24.3	15.8
	隔週		21.6	14.0
	月１回		40.5	26.3
	＜月１回		13.5	8.8
ペット				
年齢（%）	0-4 歳	50.0	2.7	20.3
	5-9 歳	36.4	32.4	33.9
	10-14 歳	13.6	32.4	25.4
	15-19 歳	0.0	32.4	20.3
種類（%）	犬	90.9	89.2	89.8
	猫	9.1	10.8	10.2

表２　罹患状況

		罹患なし (n=22)	罹患あり (n=37)	合計 (n=59)
疾病*（%）	心疾患		18.9	11.9
	腎疾患		27.0	16.9
	腫瘍性疾患		18.9	11.9
	自己免疫疾患		8.1	5.1
	内分泌疾患		8.1	5.1
	その他慢性疾患		37.8	23.7
罹患期間（%）	＜１ヵ月		2.7	1.8
	１－６ヵ月		10.8	7.0
	６－12 ヵ月		10.8	7.0
	＞12 ヵ月		70.2	45.6
食欲（%）	通常	100.0	67.6	79.7
	食欲減退	0.0	32.4	20.3
	食欲不振、廃絶	0.0	0.0	0.0

*　疾病の重複罹患あり

護対象や文言の変更を伴うことから因子分析を行った。その結果５因子が抽出され、累積寄与率は69.63％であった。各因子の命名および信頼性係数の測定結果を表３にまとめた。

⑶肯定的評価項目の構造と信頼性

本研究では飼育者の介護に対する肯定的な評価を測定する尺度として櫻井（1999）の“肯定的評価尺度”を用いた。まず、全14項目について得点分布を確認したところ、複数の項目で得点の分布に偏りが見られた。その中でも特に天井効果と考えられる２項目は以降の分析から除外した。その後、因子分析を行った。最終的に採用に至ったのは全11項目であり、２因子が抽出された。

累積寄与率は53.13％であった。各因子の命名および信頼性係数の測定結果を表４にまとめた。

⑷負担感項目の構造と信頼性

本研究では飼育者の介護負担感を測定する尺度として櫻井（1999）の“負担感尺度”を用いた。

表３　ソーシャルサポート項目の因子分析結果と各因子の信頼性（最尤法、プロマックス回転後）

変数	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
第１因子：ペットからの情緒的サポート（α = .89）					
悩みや、悲しいことがあったときなどにペットのそばへ行く	**.99**	.15	−.10	−.06	.03
楽しいこと、うれしいことがあったときなどにペットのそばへ行く	**.83**	.13	.01	−.18	.19
他の人には言えないことも、ペットには話せることがある	**.78**	−.09	−.09	.14	−.10
嫌なことがあるとペットに話しかける	**.76**	.08	−.01	.01	−.05
ストレスがあると、家族の誰よりも先にペットのところへ行く	**.69**	−.13	.01	.01	.05
ペットは他の誰よりも私のことを分かってくれる	**.54**	−.25	.28	.13	−.09
第２因子：家族からのサポート（α = .89）					
家族はペットのお世話にかかわることを手伝ってくれる	−.10	**.88**	−.01	−.01	.11
家族は代わりにペットのお世話をしてくれる	−.07	**.84**	.07	−.04	.02
家族はペットのお世話以外のちょっとした用事を手伝ってくれる	−.02	**.80**	.04	−.10	.07
家族はペットのお世話についての心配事や悩み事を聞いてくれる	.20	**.72**	−.06	.16	−.20
家族はくつろいだ気分にしてくれる	−.04	**.69**	−.05	.14	−.13
家族はペットのお世話をねぎらってくれる	.09	**.53**	.23	.09	.02
第３因子：友人からの手段的サポート（α = .93）					
友人はペットのお世話にかかわることを手伝ってくれる	.01	−.02	**1.01**	−.01	−.01
友人は代わりにペットのお世話をしてくれる	−.01	−.01	**.97**	.01	−.05
友人はペットのお世話以外のちょっとした用事を手伝ってくれる	−.02	.17	**.72**	−.05	.06
第４因子：かかりつけ病院からの情緒的サポート（α = .90）					
かかりつけ病院のスタッフはペットのお世話についての心配事や悩み事を聞いてくれる	−.08	.06	−.08	**.93**	.04
かかりつけ病院のスタッフはペットのお世話をねぎらってくれる	.04	.03	.10	**.77**	.09
かかりつけ病院のスタッフはくつろいだ気分にしてくれる	.03	.12	−.02	**.76**	.04
第５因子：友人からの情緒的サポート（α =.83）					
友人はペットのお世話についての心配事や悩み事を聞いてくれる	.13	.02	−.05	−.02	**.91**
友人はペットのお世話をねぎらってくれる	.04	−.19	.07	.11	**.91**
友人はくつろいだ気分にしてくれる	−.21	.09	−.04	.08	**.56**
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
Ⅰ	−	−.19	−.16	.06	−.09
Ⅱ		−	.38	.45	.35
Ⅲ			−	.49	.43
Ⅳ				−	.35

まず、全16項目について得点分布を確認したところ、複数の項目で得点の分布に偏りが見られた。その中でも特に床効果と考えられる１項目は以降の分析から除外した。その後、因子分析を行った。最終的に採用に至ったのは全13項目であり、３因子が抽出された。累積寄与率は53.34％であった。各因子の命名および信頼性係数の測定結果を表５にまとめた。

⑸疾病罹患の有無と介護負担感の関連

ペットの疾病罹患の有無を独立変数、介護負担感の３つの下位因子を従属変数としてt検定を行った。その結果、疾病に罹患したペットの

表４　肯定的評価項目の因子分析結果と各因子の信頼性（最尤法、プロマックス回転後）

変数	Ⅰ	Ⅱ
第１因子：介護における積極的意義（α = .85）		
ペットといるのが楽しいと感じる	**.94**	−.36
ペットのお世話をすることで、学ぶことがたくさんある	**.80**	.12
ペットのお世話を義務からでなく、望んでしている	**.73**	−.16
ペットのお世話をするのが、自分の生きがいになっている	**.64**	.23
お世話をすることで、ペットと親密になったように感じる	**.45**	.37
ペットをお世話することによって、満足感が得られる	**.41**	.33
第２因子：介護に対する手応え（α = .81）		
お世話のおかげで人間として成長したと思う	−.21	**.76**
ペットがお世話に感謝したり、喜んでいると感じる	.06	**.71**
ペットのお世話をしていて、逆に自分が元気づけられたり、励まされたりする	.19	**.71**
お世話をすることは、自分の老後のためになると思う	−.19	**.67**
お世話のおかげで難しい状況に対処する力など、自信がついた	.02	**.64**
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ
Ⅰ	−	.48

表５　負担感項目の因子分析結果と各因子の信頼性

変数	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
第１因子：介護に対するとらわれ（α = .84）			
病院か施設でお世話してほしいと思う	**.74**	−.12	−.13
お世話で気が抜けないと感じる	**.71**	.22	−.10
お世話のために家事、買い物、家族の世話、仕事などに支障がある	**.71**	.07	−.15
誰かにペットのお世話を代わってもらいたいと思う	**.70**	−.15	.16
ペットのお世話をすることに負担や重荷を感じる	**.69**	.06	.09
趣味や学習をしたり、くつろいだりする時間がない	**.53**	.02	−.01
お世話で体のあちこちに負担がかかっている	**.51**	.01	.29
お世話のためにやることが沢山あって、時間に追われている	**.48**	.13	−.05
これ以上ペットのお世話を続けることはできないと感じる	**.47**	−.27	.16
第２因子：対人葛藤（α = .89）			
家族や親戚があなたの悪口を言ったり、非難したりする	−.01	**.99**	.05
ペットのことで、家族や親戚と意見が食い違うことがある	.05	**.79**	.08
第３因子：経済的負担（α = .72）			
ペットのお世話をするのに十分な経済状態でない	−.11	.02	**1.03**
お世話が経済的な負担になっている	.05	.15	**.54**
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	−	.16	.33
Ⅱ		−	.13

飼育者は疾病に罹患していないペットの飼育者より有意に「経済的負担」が高いことが分かった（t（54.74）＝3.65, p<.01）。「介護に対するとらわれ」および「対人葛藤」と疾病罹患の有無の間には有意差は認められなかった。

⑹介護負担感に影響を及ぼす要因の検討

ペットの疾病罹患なし群、疾病罹患あり群それぞれに対してソーシャルサポート尺度の５つの下位因子、肯定的評価尺度の２つの下位因子、BigFive尺度の５つの下位因子（計12因子）を独立変数に、負担感尺度の３つの下位因子それぞれを従属変数として重回帰分析を行った。なお、独立変数は変数減少法を用いた投入を行った。

１）疾病罹患なし群

負担感尺度の下位因子である「介護に対するとらわれ（以下、とらわれ）」においては、〔ペットからの情緒的サポート，β=.69（p<.01）〕〔友人からの手段的サポート，β=-.57（p<.01）〕〔誠実性，β=.72（p<.01）〕〔開放性，β=-.57（p<.05）〕，R=.80，調整済みR^2=.50であった。なお分散分析の結果は〔F（6,15）=4.50，p<.01〕と有意であった。またVIFは全て10.0未満であり、独立変数間に多重共線性は生じていないことが確認された。

「対人葛藤」においては、〔友人からの手段的サポート，β=.51（p<.01）〕〔友人からの情緒的サポート，β=-.85（p<.01）〕〔誠実性，β=-.52（p<.01）〕〔情緒不安定性，β=.65（p<.01）〕〔開放性，β=.47（p<.01）〕，R=.89，調整済みR^2=.73であった。なお分散分析の結果は〔F（5,16）=12.5，p<.01〕と有意であった。またVIFは全て10.0未満であり、独立変数間に多重共線性は生じていないことが確認された。

「経済的負担」においては有意な回帰式を認めなかった。

疾病罹患なし群の重回帰分析結果のうち、有意な結果が認められた独立変数のみを抽出し図１で示した。

２）疾病罹患あり群

「とらわれ」においては有意な回帰式を認めなかった。

「対人葛藤」においては、〔家族からのサポート，β=-.51（p<.01）〕〔情緒不安定性，β=-.32（p<.05）〕〔調和性，β=.33（p<.05）〕，R=.62，調整済みR^2=.31であった。なお分散分析の結果は〔F（4,32）=5.00，p<.01〕と有意であった。またVIFは全て10.0未満であり、独立変数間に多重共線性は生じていないことが確認された。

「経済的負担」においては、〔友人からの情緒的サポート，β=-.36（p<.05）〕〔誠実性，β=-.45（p<.01）〕，R=.55，調整済みR^2=.23であった。なお分散分析の結果は〔F（3,33）=4.64，p<.01〕と有意であった。またVIFは全て10.0未満であり、独立変数間に多重共線性は生じていないことが確認された。

疾病罹患あり群の重回帰分析結果のうち、有意な結果が認められた独立変数のみを抽出し図２で示した。

４．考察

本研究ではペット飼育における介護負担感の測定及び、介護負担感に影響を与える要因の検討のために、動物病院に通院する飼育者（主として世話や介護を行う者）を対象に質問紙調査を行った。

⑴疾病罹患の有無と介護負担感について（仮説１）

疾病罹患の有無を独立変数、介護負担感尺度の下位因子である「とらわれ」「対人葛藤」「経済的負担」を従属変数としたt検定では、「経済的負担」のみ有意差が見られた。よって、仮説

１は介護負担感のうち「とらわれ」「対人葛藤」については支持されなかったが、「経済的負担」については支持された。

１）とらわれ、対人葛藤について

疾病罹患の有無と「とらわれ」及び「対人葛藤」の間に有意差が見られなかった要因の一つとして、ペット飼育自体が持つ介護的な側面の影響が考えられる。介護とは入浴、排泄、食事、その他の生活行為を援助することであり（厚生省，1987）、ペット飼育に伴う一般的な“お世話”の内容と重複する事柄が多い。“お世話”の負担の程度はペットの躾状況により変化すると考えられるが、介護負担感尺度における「とらわれ」と「対人葛藤」は飼育者とペットの関係性により“お世話”の段階で生じている可能性があると言えるだろう。

２）経済的負担について

獣医療では人医療における国民皆保険制度のような公的保険が存在しないため、診療・治療費は全額飼育者の自己負担となる。民間企業によるペット保険制度も存在するが、加入率は9.1%に留まっている（アニコムグループ，2019）。その一方で獣医療の発展に伴い診療・治療費は高額となるケースも増加しており、日常的に遭遇する疾患である犬の心臓弁膜症や猫の慢性腎臓病でも年間平均診療費が約22万～27万円と非常に高額となっている（アニコム「家庭どうぶつ白書」制作チーム，2019）。ペットの飼育自体にもやはり「経済的負担」の側面はあるが、想定を上回る支出が負担感へとつながっているものと考えられる。

⑵介護負担感に影響を及ぼす要因について（仮説2，３，４）

１）仮説２の検証

本研究では、疾病罹患の有無に関わらず肯定的評価から負担感への影響は見られなかった。よって仮説２は棄却された。ただし、本研究において肯定的評価尺度の得点は総じて高値となっており、比較に用いるには不適当となっている。そのため、肯定的評価の負担感への影響を検討するには配布方法に加え使用する尺度についても再考する必要があるだろう。

２）仮説３の検証

ソーシャルサポートの内容により、介護負担感を増加させる影響を持つサポートと、低減させる影響を持つサポートが認められた。よって仮説３は部分的に支持された。

疾病罹患なし群において、負担感の低減を期待した因子である「ペットからの情緒的サポート」の高さが「とらわれ」を増加させる結果となった。「ペットからの情緒的サポート」は人とペットの愛着を測定する尺度の一部である

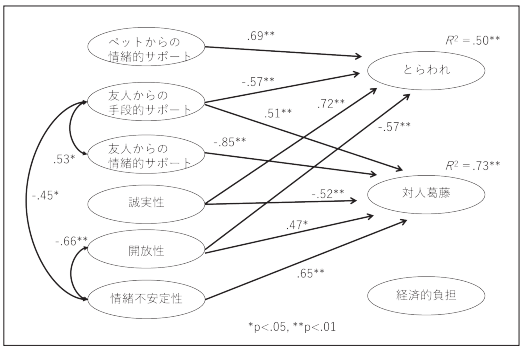

図１　疾病罹患なし群　重回帰分析結果

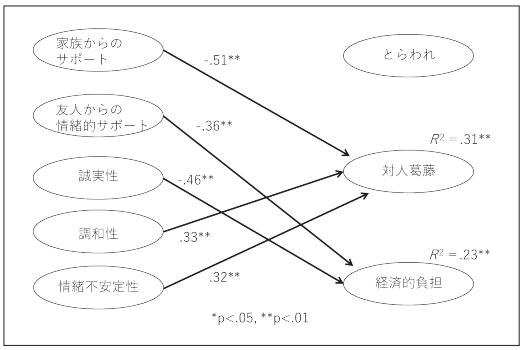

図２　疾病罹患あり群　重回帰分析結果

が、金児（2018）によるとペットへの愛着は「基本的で健全な愛着」と「依存的な愛着」へ概念的に分離が可能であるとされる。なおここで言う依存的とは「人が自らの精神的な安定性を保つために、精神的にペットに頼っている状態」と定義されている。そこで改めて本研究で用いた下位尺度の項目を吟味すると、いずれも他者との比較においてペットがより重要な存在であるという認識を測定していることが窺われる。そのため、本研究における「ペットからの情緒的サポート」は「依存的な愛着」の程度を測定している可能性が高い。次に負担感尺度の下位因子である「とらわれ」は、櫻井（1999）の負担感尺度における介護に伴う拘束により日常・社会生活に支障をきたす“拘束感”と、介護に伴う責務・重圧から逃れたいと願う“限界感”に相当する項目から構成されている。疾病罹患なし群では、このうち“拘束感”に相当する項目の点数が高かった。これらを総合すると、依存的な愛着を持つ飼育者はペットの“お世話”を優先するあまり自身の行動が制限されており、「とらわれ」による負担感が増加傾向となっていることが示唆される。

疾病罹患あり群において、「友人からの情緒的サポート」には「経済的負担」を低減させる結果が得られた。本研究の「友人」は散歩仲間等、ペットを介したつながりも含んでいる。あくまで推測だが、そういった友人たちで形成されるコミュニティからは治療費に関わる情報を得る機会も多いと思われる。動物病院での診療は自由診療であり、病院ごとに治療費が異なっている。情報入手に伴い治療費の不透明感が軽減されることが「経済的負担」を低減している可能性がある。今回、「かかりつけ病院からの情緒的サポート」からは正負ともに影響が見られなかったが、治療開始前に選択肢ごとの金銭的負担も含めたインフォームドコンセントを徹底することで負担感を低減できるのではないだろうか。

３）仮説４の検証

パーソナリティ特性では、「外向性」を除く４因子で介護負担感への影響が見られた。よって仮説４は部分的に支持された。

疾病罹患あり群において、「調和性」の高さが「対人葛藤」を増加させる結果が得られた。「調和性」が高い者は相手を肯定的に受け入れる傾向を示すとされており（橋本・小塩，2017）、人医療では「調和性」の“低さ”が介護場面における介護者の抑うつ状態と正に関連するという報告が見られる（松村他，2016）。本研究では介護者の抑うつを測定してはいないが、抑うつと介護負担感には正の相関があるという報告は複数存在する（安田・村田，2011；松村，2014等）。そのため、「調和性」の“高さ”が介護負担感に正の影響を与えるという結果は獣医療独自の傾向を示唆している可能性がある。この要因の一つとしては、先だって述べたように本邦の国民性及び「ペットの介護」に対する周囲の理解度が関連していることが考えられる。人の介護と異なりペットの介護は社会的なサポート資源に乏しく、介護者は自身の力量によって社会生活との両立をしなければならない現状がある。「調和性」の高い者は他者配慮選好（ネトル，2009）がありながらも、周囲からは十分な理解が得られないために「対人葛藤」を生じているのではないだろうか。

５．課題と展望

本研究では慢性・進行性疾患に罹患したペットの飼育者の介護負担感を軽減する要因の検討を目的とし、いくつかの結果を得ることが出来

た。少子高齢化・人間関係の希薄化・情緒的な関りをペットに求める飼育者の増加という本邦の社会的背景のもと、ペット飼育者に対する心理的支援は今後その重要性を増していくものと筆者は考えている。

ただし、研究デザインに粗も多数見られるため、より緻密な研究計画を立案・実施し、更なる知見を積み上げていく必要がある。また、本研究はあくまで介護負担感低減の要因を検討したに留まっているため、真の支援とするには実際的な支援についても検討していかねばならない。

また、本来の主旨とは外れる内容ではあるが“ペットのお世話”そのものの介護負担感からの検討はこれまで報告が見られていない。近年、本邦では動物虐待が社会問題となっているが、ペット飼育に関わる負担についての適切な情報を得る機会が増えることで減少の一助となる可能性がある。そのためには多方面からの検討が必要であり、「介護」の視点も役立つと考える。

引用文献

アイペット損害保険株式会社広報グループ　2018 ペットと暮らした子ども、“感受性が豊かになる”が約半数～ペットと子どもに関する調査～　アイペット損害保険株式会社　2018年４月27日＜https://www.ipet-ins.com/info/13719/ ＞（2020年12月２日）

アニコム「家庭どうぶつ白書」制作チーム　2019 アニコム家庭どうぶつ白書2019　アニコムホールディングス株式　会社

アニコムグループ　2019　中期経営計画2019-2021 アニコムホールディングス株式会社

大臣官房統計情報部社会統計課国民生活基礎調査室　2011　平成22年国民生活基礎調査の概況 厚生労働省　2011年７月12日＜https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa10/index.html＞（2020年12月２日）

濱野佐代子　2007　コンパニオンアニマルが人に与える影響：愛着と喪失を中心に　白百合女子大学大学院博士論文

濱野佐代子　2020　人とペットの心理学　コンパニオンアニマルとの出会いから別れ　北大路書房

橋本泰央・小塩真司　2018　対人特性とビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性との関連―メタ分析による検討　パーソナリティ研究, **26**（３）294-296.

門田昌子・寺崎正治　2009　パーソナリティ, 日常的出来事と主観的幸福感との関連　パーソナリティ研究, **18**（１）, 35-45.

金児恵　2018　コンパニオン・アニマルへの愛着の多次元性：基本的愛着および依存的愛着と精神的健康との関連（開学50周年記念号）　北海道武蔵女子短期大学紀要, (50) , 251-267.

木村祐哉・金井一享・伊藤直之・近澤征史朗・堀泰智・星史雄・川畑秀伸・前沢政次　2016　ペットロスに伴う死別反応から医師の介入を要する精神疾患を生じる飼主の割合　獣医疫学雑誌, **20**（１）, 59-65.

桐野匡史・桒田菜摘・出井涼介・松本啓子　2016 在宅で高齢者を介護する家族のソーシャルサポートと介護負担感の関連性　社会医学研究, **33**（２）, 51-60.

厚生省　1987　社会福祉士及び介護福祉士法　厚生労働省＜https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=82021000&dataType=0&pageNo=1 ＞（2020年12月21日）

松村香　2014　介護者の抑うつ状態や介護負担感と「介護に関する困ったことや要望」に関する自由記述との関連　日本健康医学会雑誌, **23**

（２）, 125-135.

松村香・沼田加代・畠山玲子・小林きよみ・工藤明美・有田明美　2016熊本市およびその近郊における主介護者の抑うつ状態に影響を及ぼす要因研究―主介護者の性格特性を加味して―　厚生の指標, **63**（１）. 30-37.

内閣府政府広報室　2010　動物愛護に関する世論調査　内閣府　2010年11月１日＜https://survey.gov-online.go.jp/h22/h22-doubutu/index.html＞（2020年12月２日）

並川努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根愛・野口裕之　2012　Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討　心理学研究, **83**（２）, 91-99.

ネトル.D.　／竹内和世（訳）　2009　パーソナリティを科学する 特性５因子であなたがわかる　白揚社（Nettle, D. 2007 *PERSONALITY: What Makes You the Way You Are*. Oxford Landmark Science）

西村昌記　2014　家族介護者ソーシャルサポート尺度の開発　老年社会科学, **36**（１）, ３-12.

ペットフード協会　2019　令和元年全国犬猫飼育実態調査　一般社団法人ペットフード協会　2019 年 12 月 23 日　＜https://petfood.or.jp/data/chart2019/index.html＞（2020年５月23日）

櫻井成美　1999　介護肯定感がもつ負担軽減効果　心理学研究, **70**（３）, 203-210.

総務省統計局　2020　我が国のこどもの数 -「こどもの日」にちなんで -（「人口推計」から）総務省　2020年５月４日＜https://www.stat. go.jp/data/jinsui/topics/topi1250.html＞（2020年５月23日）

Uchida, Y., *Norasakkunkit*, V., & *Kitayama*, S. 2004　Cultural constructions of happiness: Theory and empirical evidence. *Journal of Happiness Studies,* **5**, 223-239.

安田直史・村田伸　2011　要介護高齢者を介護する主介護者の抑うつに影響を及ぼす因子の検討　西九州リハビリテーション研究, **4**, 59-64.